

埼玉県は電気羊の夢を見るか ～エディブル・ランドスケープを通して見る埼玉県の可能性～



聖学院大学 人間福祉学部こども心理学科 教授 渡邊 正人

1 はじめに

ご存知の方もあろうが、このタイトルはSF小説「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」をもじったものである¹。

その内容であるが、未来の世界、過酷な火星での作業のために作られたアンドロイドたちは、非常に高度に作られているため、人間との区別がつきにくく、中には自分がアンドロイドだと気が付かない者もいるほどである。話は、悩んだアンドロイドの数人が、自分に設定された寿命や自分が本当にアンドロイドなのかを確かめるために地球に逃げ出し、そのことで追われる身となる。こうして、自分は人間なのか、アンドロイドなのか、人間とは何か、という哲学的な思索へも向かう。この作品は人工知能の問題としても話題となった作品で、不思議なタイトルは、そうした人工知能と人間とを見分けるチューリングテストを指しているとも言われる。チューリングテストとは、人間と機械の対話の中で、人間が人工知能の応答の不自然さを見つけるもので、人工知能は機械的、すなわち理論的に物事をとらえ、判断するので、たとえば「電気羊とは何か？」とか「そもそもアンドロイドは夢を見るのか」といった非論理的に見える質問に反応しにくい。しかし人間は、イメージとして物事をとらえることができるため、想像力豊かな答えも同時にできる。こうした反応の相違を見極めながら区別をつけるテストである。

突然、こうした表題を掲げたが、さて、はたして「埼玉県は電気羊の夢を見る」のであろうか？ここで問いかけてみたいのは、埼玉県が理屈に走りすぎ

ず、想像力豊かであろうとするか、ということである。それは、人の営みについて、人間的な、きちんとした眼差しがあるか、ということでもある。

2 エディブル・ランドスケープ ～食べられる景観～

埼玉県に限らず、日本において、私たちの身近な風景は、多くは自然と人間が共存した景観をなしている。その比率として、自然の多い風景は農村的であり、人間の生活の風景のほうが多いような景観は、いわば「都市的景観」であるといえよう。ここには明確な区切りが無い。こうした連続的な景観のなかでの生活の在り方を、かつて柳田國男は「都市農村連続論」というとらえ方をした²。それは、都市という場所が、人が農村から移住してくる場所であったからだし、なによりも都市と農村の間には空間的にも区切りが無いからであった。柳田は、農村と都市との関係を、農村は都市への人的資源や生活物資の供給源であり、そこに人々が出かけて行っても、やがては農村へ帰る、という循環を想定していた。そして、その都市に暮らす間の人々の心意の特徴を「帰去来情緒」という言葉で表した³。

これは、都市というものが、農村から出てきた人たちによって多くは構成され、あるいは「窮屈な社会道徳の監視から抜け出して、一種の隠蔽物を求めるやうな心持で、大きな町の奥に入り込んだ者も少なくは無い」といったような逃避的な住民すらもいたり、あるいは「衣食住の材料を自分の手で作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄かに不安にも又鋭敏にもした」という。

だから、「生存の資源から、次第に遠さかって行くといふ非農民の不安が、彼等の故郷を忘れ難いものにする」というのが「帰去来情緒」という語である。その結果、郊外の農村を都市化することで、準都市民となり、都市に暮らす不安を少しでも和らげようとしたのだともいう。

さて、こうした都市的な部分と農村的な部分が交互に現れたり、共存する景観の特徴を、「エディブル・ランドスケープ～食べられる景観」というコンセプトでとらえなおしてみると、この都市と農村をつなぐものにならないかと考えている。これは、文字通り「食べられるものに取り囲まれた風景」であり、最近のまちづくりなどでもよく話題とされている。身の回りの緑を「食べられるもの」にすることで、地産地消や食育、住環境などを考えてゆこうとするのである。

埼玉県は、もともと農業県で、周囲の緑地は大半が食べられるものに関する風景に恵まれているの言うまでもない。象徴的なものは、たとえば武蔵野の風景で、先日世界農業遺産を目指した三富新田などは、平地林である雑木林と農地と農家といった「暮らし全体」が食べられるものと関係している。その他、各地に広がっている里山も同じだろう。そのため、農作物だけではなく、果樹などの生産量も多く、平成24年度の農業産出額は全国18位ではあるが、産出額日本一のものも多い⁴。また、「川の国埼玉」と自称するように、荒川流域や利根川流域など、昔から深く生活に結びついている。しかも水源である秩父山地から、下流に近い平地の県南部まであり、上流から下流まで、山地から平地までの様相が異なった生活と文化を生み、バリエーション豊かな「埼玉」が川によって特徴づけられている。さらに、こうした豊富な水は、伏流水ともなり、豊かな米とも結びつき、日本酒の蔵元を生み、国内でもトップクラスの日本酒王国になっている。

こうした伝統的な食べられる景観を現在でも保持

している一方、都市部では家庭菜園や最近では夏の暑さ対策の緑のカーテンも食べられるものを配することが多い。これらの風景は、三富新田などの伝統的な地域を除けば、むしろ全国的なものであるが、埼玉県の場合、このバランスが特に良いのではないかと、ということである。

また、現代的な「工場のような建物」であっても内部では、食品を加工しているものも多い。埼玉県の地の利といえるが、東京に近く、関東の中央部でもあり、また、北陸や東北への入り口でもあるので、ここで加工された食品が各地のスーパーやコンビニにも運ばれてゆく。こうした工場見学なども最近では盛んにおこなわれ、われわれの身近な食べられる景観となっている。

つまり、埼玉県は、伝統的な農村的な手法で生み出される食べられるものと、現代的な都市的な手法で生み出される食べられるもの、そして住民が楽しみなどのために作り出す食べられるものなどに囲まれていると言えよう。ちなみに食品をはじめとした地場産業も身近に多くあり、そのすそ野を広げている⁵。

ここで言いたいのは、では埼玉県はこの先、このコンセプトでまちづくりをしてゆけば良い、といった単純なことではない。それもあるかもしれないが、課題はそこに「暮らす」という視点である。かつて倉沢進は都市社会学の立場から、都市の生活を「生活上の問題処理の方法に着目して、第一に問題の自家処理能力の低さ、第二に、共通問題の専門機関による専門処理」という特徴として指摘した⁶。柳田の指摘するような生産基盤から離れ、自給自足ではなく、分業化し、消費側にまわるといふ都市生活の認識はほぼ同じであろう。だが、それが人々の心意に、必ずしも良い面だけではないことは、現代社会がすでに示しているところでもある。都市と農村というとらえ方をした場合、相互に関連性を持ちながらも、暮らし方において実は大きな溝がある。今、都市部に暮らす人々が、柳田の言うような「帰去来

情緒」を持っているとは限らないが、都会の便利な生活と癒しのある緑に囲まれた生活にあこがれる背反した思いを抱く人々は一定数いるだろう。その意味では、埼玉県はとても住みやすいのである。都市部の要素と農村部の要素をあわせもつことの意味を再評価すべきではないだろうか。埼玉県は、都市的な生活の中で、農村的な基盤との融合が図れる物心両面の安定が図れる場所ではないか、ということである。

また、さらにこうした先には「地球に暮らす」という大きな視点がなければならない。地球は人間が生きるためだけのものではなく、多様な生物との共生が前提となっていることは、もはや当たり前といえるが、その良い例として挙げられるのが里山・里海などの人の手の加わった自然である。これらの自然は、先にも触れたように典型的な食べられる景観であり、人の一生においても、幼少期から老年期に至るまで、こうした風景の中で過ごしてくることで、単なる「余所者」ではなく、景観の中に「住み込む」ようになってゆく。

少し前の話になるが、平成13年3月から5回、政府は「21世紀『環（わ）の国』づくり会議」というものを開催した⁷。平成13年7月に出されたその報告書の「はじめに」では、次のように述べられている⁸。少し長いが、引用しておく。

「21世紀を迎えた今、地球温暖化問題をはじめとして、人間活動が地球の環境に与える影響の大きさが広く認識されるようになりました。これに対して、地球環境には限りがあり、自然の浄化能力を超える環境汚染、自然が再生産できない資源の枯渇、取り返しのつかない生物種の絶滅など、危機的な状況が明らかになっています。

大気、水、土壌、多様な生物などから構成される地球の環境は、これらの微妙な均衡の上に成り立っており、そのような地球生態系の"環"の一部を損な

うと、どのような波及的影響が生ずるか予想しがたいところがあります。そして、この地球生態系は、人類の生存の基盤であり、これを損なってしまっは、人類が将来にわたり地球上で生存していくことができなくなるかもしれません。

私たち今を生きる人間は、21世紀、さらにはその先の世紀を生きる子孫、そして地球上に生きとし生ける物に対して、恵み豊かな地球環境を確実に引き継ぎ、人類が地球と末永く共生していけるように努力する責務があります。」

そして、同じく「4. 生態系の環 ―自然と共生する社会の実現のために―」では、「日本の伝統的自然観の伝承と最新科学との融合」として、次のような文章が載せられている。これも少し長いが、引用しておく。

「日本列島に暮らした人々は、古来、豊かな自然の恵みを享受してきており、自然を持続的に利用する知恵と技、自然の風物を慈しむ文化を育んできました。こうして育まれた日本の伝統的自然観は、自然を単に利用する対象ではなく、共感すべきもの、共に生きるものと捉えるものであり、変転する自然の存在を認め、それに手を入れながら付き合っていくという自然に対する態度の基底となっています。

このような自然観により、かつてわが国では、里地・里山の管理のような模範的な生態系管理が行われていましたが、自然征服的・非循環型の社会経済や生活のあり方が支配的となった20世紀において、わが国の自然生態系は衰弱してきています。残された自然生態系をこれ以上衰弱させないことはもとより、これからは、わが国伝統の知恵と技に最新の科学を融合させ、自然共存・循環型の社会経済や生活へ転換することにより、自然生態系を蘇らせる21世紀にしていく必要があります。

このため、多様な生物の生息地、水源のかん養、

環境の浄化など、生態系が持つ様々な機能とそれを支える水・物質循環系の機能を明らかにして、これを再生・回復させるためのデータ整備や問題対応型の統合的な研究開発を進める必要があります。また、鎮守の森や植樹祭のようなわが国の伝統的遺産や緑化行事は、自然環境を守るバックボーンとなっており、大切に伝承していくことが望まれます。]

報告では、主として温暖化の問題やごみの廃棄問題など、環境に関する問題を取り扱っているが、解決すべき方向として、住民・企業との協働、環境教育・学習を通じた「人の環」の形成を挙げている。そして「モノの豊かさから心の豊かさへ、公共の精神・中庸の精神のかん養、人間中心から生命中心へ、少欲知足、次世代にツケを回さない、このような環境倫理が社会の共通認識となるよう努めていくことが必要」だと指摘している。

引用が多くなって恐縮だが、さらに「環境産業革命」を推進していくためには、地域からの視点も重要です。お互いの顔が見え、その成果を実感できる人口30万人程度の自己完結性の高い地域において、「農」・「食」・「住」の産業のハイテク化を進め、原料生産、加工、流通、消費を地域の中で一体化することにより、地域経済の発展を図りながら地域の資源循環を確立していくことが重要」だという指摘は、埼玉県現状としても通じるのではないかと。

筆者は、行政の専門家ではないので、寡聞にして聞かないが、この会議からすでに13年経つが、埼玉県はこの方針を、当時どのように受け止めたのだろうか。もし、この流れの中で政策決定がなされているとすれば、それは埼玉県が、正しくこの路線を歩んでいることであり、先進的な取り組みを実現している良い例証であることになる。もし、そうでないとしたら、埼玉県の歴史的地理的な特色を生かした政策立案が、結果的に先進的な取り組みと合致しているということでもある。いずれにしても、埼玉県の良さを生かしていることに他ならない。

3 さいごに

少しまとまらないまま書き連ねてきたが、こうした「環境産業革命」とか「物質循環の環ーゴミゼロ」などといったフレーズで、我々の生活を考えるよりは、埼玉県の場合は、先に挙げたような「エディブル・ランドスケープ～食べられる景観～」といったほうがより総合的な観点が包摂できるように思われる。何よりも、住民や企業との協働を目論むとき、ゴミゼロといったキャッチフレーズでは夢がないではないか。「食べ物」という生命の根源を、守り育て、流通させるためには、自然のみならず工業、流通、ICT技術なども必要であろうし、それらを支える人材の育成も必要である。環境を守り育てる心を育てることも必要だろうし、何よりも埼玉県を「故郷」として愛する心が芽生えなくてはなるまい。単なる居場所では困るのである。その時「食べ物」を通じた楽しみの環が広がれば、それらを身の回り、将来の問題として受け止めやすいのではないだろうか。

そして、なによりも、このようないくつかの、突拍子もないと思われる事柄をつなぐ想像力が、今、一番求められているのだと思う。表題の映画のほうでは、過酷な環境の火星と、酸性雨の降り続く地球が舞台である。どちらも環境は悪化しているが、映画の最後では緑の大地へと主人公が赴くところを暗示する。

我々の社会は、いったいこれからどこへ向かうのであろうか。

どこまで広く、深く想像力を働かせるか、はたして埼玉県は電気羊の夢を見ることができているのか、それに対する答えを期待している。

脚注

- 1 フィリップ・K・ディック「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」早川書房 1969。後にリドリー・スコット監督により映画化され、「ブレードランナー」として1982年公開された。あらすじ等は映画版も利用している。
- 2 柳田國男「都市と農村」柳田國男全集第29巻所収 筑摩書房（ちくま文庫）1991
- 3 柳田國男「都市と農村」柳田國男全集第29巻所収 筑摩書房（ちくま文庫）1991
- 4 <http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/599632.pdf>
- 5 <http://www.pref.saitama.lg.jp/page/jibasanngyou.html>
- 6 倉沢進「都市的生活様式論序説」磯村英一編『現代都市の社会学』鹿島出版会 1977年
- 7 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/wanokuni/>
- 8 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/wanokuni/010710/report.html>

寄稿者

渡邊 正人（わたなべ まさと）

聖学院大学 人間福祉学部こども心理学科 教授

専門：古代文学、考古学

経歴：2009年4月より現職。彩の国さいたま人づくり広域連合の平成26年度政策課題共同研究「ビッグデータ・オープンデータ活用戦略」に研究員として参加。

主な著書：前戸崎2次・戸崎中遺跡発掘調査報告（共著）2010年3月
氷川神社東遺跡 大宮市遺跡調査会報告第42集（共著）1993年3月
他遺跡発掘調査報告書（共著）多数